

---

---

## 編集後記

最近、小学校にプログラミング教育を導入し必修化することに関する議論が行われている。推進派は、論理的思考を小さい時から行うことの利点を主張している一方、慎重派の主張は、論理的思考は従来の科目においてもできる上、「物事にはそれを学ぶ最も適切な年齢がある」、「情報化社会を生きていく上で新たに学ぶべきことは多いと思うが、プログラミング教育はそれに適していない」という内容である（同志社大学 三木光範 産経新聞，平成28年8月1日）。

最近の学生を見ていると、自然や身近な周囲のこと、研究のこと（自分の研究課題だけでなく同じ研究室の他の学生の課題）に対する興味が薄いように感じる。就職活動における企業の面接で「自分はものづくりに興味があるから」という理由を志望動機に述べている割には、就職が決まった後も、一生の仕事にするほど本当に興味があるのか疑問に感じるのは、理工系研究室の教員であれば私だけではないであろう。

世の中が物質的に豊かになると同時に、居住空間においても生の自然から隔絶された、いわば人工的環境で幼少から育ったことが大きいのではないか、昆虫との遭遇もない、植物の生命力に驚くこともない、空が小さく湧き上がる入道雲を眺めたこともない、夜が明る過ぎて無数の星を観ることもない、生の自然に対し五感を精一杯働かせ、自然の

素晴らしさ・不思議に感動する機会もないばかりか、自然に対する畏敬の念も抱かずに育ったのではないかと危惧する。単細胞生物を対象としても、その複雑さ、生き延びる巧妙さを科学的に解明することは、恐らく今後数百年間では難しいであろう。

確かに現在の科学レベルで簡単に解明できる「山」は殆んど制覇されたかもしれない。言いたいのは、物質的に豊かになり、普通の生活が何不自由なく送れるようになって、科学で解明すべき自然現象・生命現象には無限の深さがあり、そうしたワクワクした探究を休む暇などないということである。私は、所詮は人間が設計した枠組みであるプログラミングの教育よりも、幼少期に生の自然にありったけの五感を使って触れる体験をもつことの方が、未来の優れた研究者・技術者育成だけでなく、夢をもって生きるには遥かに重要であろうと思う。ましてや、もしもプログラミング教育の必修化が、そうした教材で儲けようとする企業の戦略に絡んでいるとしたら、本当に悲しいことである。

金井 浩

東北大学大学院工学研究科電子工学専攻  
／医工学研究科医工学専攻

---

---

超音波医学

Japanese Journal of

Medical Ultrasonics

第43巻 第5号（通巻第295号）

© The Japan Society of Ultrasonics in Medicine

——禁転載——

本体価格 2,000円＋税（本誌購読料は会費に含まれます。）

平成28年9月15日発行

編集者 公益社団法人日本超音波医学会編集委員会 委員長 金井 浩

発行者 公益社団法人日本超音波医学会 理事長 工藤 正俊

〒 101-0063 東京都千代田区神田淡路町 2-23-1

お茶の水センタービル 6階

TEL 03-6380-3711

FAX 03-5297-3744

印刷所 大村印刷株式会社